日本の林業遺産を知ろう

甲賀市甲南ふれあいの館の展示

甲賀の前挽鋸製造および流通に関する資料群

一般社団法人 日本森林学会 林業遺産選定委員長　京都大学　深町加津枝

滋賀県南部の甲賀地域には豊かな森林資源があり、特に杣川流域の杣谷と大戸川流域の信楽谷は大和・山城に隣接し、古代から用材の供給地となっています。杣師、木挽により伐採、製材されたヒノキやスギの大径の天然木は、東大寺や石山寺の造営にも利用されました。この頃の木挽による製材は、楔（くさび）や鑿（のみ）で木を叩き割る打割製材であり、木目が通って割りやすいスギやヒノキ、クリが利用されてきました。室町時代になると朝鮮半島より二人で使用する製材用の縦挽き鋸、大鋸が導入されて柱や板の製材が可能になりました。安土桃山時代は、日本独自に工夫を重ねた一人挽きの製材用鋸、前挽鋸が主流となり、製材工程が効率化されました。そして、割裂性が悪いため利用されなかったアカマツやケヤキなども構造材として利用できるようになり、日本建築の様式に影響を与えました。

前挽鋸の生産の中心は京都でしたが、江戸中期（1752年頃）に製造技術を持った天王寺屋九右衛門（福本家の先祖）が京都から地元・甲賀に戻り、前挽鋸鍛冶を開始しました。その後、甲賀前挽鋸が流通し、甲賀地域は前挽鋸製造の中

心地となっていきました。前挽鋸は杣川流域の森尻、深川、三本柳、牛飼、杣中などの集落で製造され、八里平右衛門、福本九左衛門、今村庄九郎などの有力な業者は登録商標を行ったブランド名を持っていました。

前挽鋸の原材料の鋼には和鋼が使われましたが、明治時代になると洋鋼が導入され、生産量が大きく増加しました。甲賀地域の職工の数は多い時で300人に及び、販路は全国に広がり、戦前には樺太、朝鮮半島、台湾からの発注もありました。しかし、昭和初期に帯鋸などの製材機械が普及するようになると前挽鋸の生産量は激減し、昭和30年代を最後に製造が終了しました。

甲賀地域の前挽鋸の製造に関わる資料や道具一式は、「甲賀市甲南ふれあいの館」に保管、常設展示され、一連の調査結果は報告書『近江甲賀の前挽鋸』にまとめられています。資料には、江戸中期から明治30年代にかけて前挽鋸の製造と販売に従事した福本家に伝えられた全1,223点の文書群があります。製造道具一式は、八里平右衛門家の工場が昭和61(1986)年に解体される際に寄贈され、鋸の形を造るのに必要な「黒打ちの用具」、表面を平らに仕上げるための「透きの用具」などがあります。また、検品をして刻印を入れて造られた鋸製品、鋸を作る職人や木挽に関係する資料、流通先の記録に加え、平成時代に前挽鋸製造の技術者から収集した写真、製造工程の作業を記録した動画もあります。それらの一部は平成27(2015)年に、「近江甲賀の前挽鋸製造用具及び製品」として国重要有形民俗文化財に指定されています。甲賀地域で最後の木挽であった田中新治郎さんへの聞き取り調査結果からは、ひとつとして同じものがない樹木を相手に伐木や製材を行ってきたこと、そして木を熟知した木挽としての誇りが分かります。

「甲賀の前挽鋸製造および流通に関する資料群」は、体系的に林業、製材業における前挽鋸の果たした役割を伝える重要な林業遺産です。前挽鋸という1つの道具の出現により、木挽の仕事の幅が広がり、森林の資源利用形態、木の文化にも影響を与えました。「甲賀市甲南ふれあいの館」の展示や普及・啓発に関わる佐野正晴さん(甲賀市教育委員会事務局)は、「木挽の仕事、そして前挽鋸製造および流通に関する資料群を多様な視点で読み解き、関心を持ってほしい。」と話します。林業に関わる道具の歴史や多様な価値を共有することは、これからの人と自然との関わりのあり方を考える大事な一歩になるでしょう。

前挽鋸

木挽職人

前挽鋸製造過程

前挽鋸製造・販売に関する文書

今村庄九郎商店の看板

展示を案内する佐野正晴さん

甲賀市甲南ふれあいの館